

「アリス物語」

— 作品中にあらわれるマザー・グース —

蓼原静香

目次

はじめに

第一章 マザー・グースと「アリス物語」のナンセンス性

第二章 マザー・グースの住人たち

(一) ハンプティ・ダンプティ

(二) トウィードルダムとトウィードルディー

(三) ライオンと一角獣

第三章 イギリス遊戯歌『桑の木まわって』

第四章 アリス物語にてくる唄のパロディー化

第五章 ルイス・キャロルのオリジナル詩

『ジャバウォックの歌』(本文掲載省略)

おわりに

はじめに

最初にアリス物語に出会ったのは、小学三年のとき、図書館であつたと思う。ぶ厚いその本を私は、読もうと試みたが言葉の意味、とくに会話の意味が分からず放り投げた。私がひどくあきつぽい

めじゃない、日本語が変なのだ。ちゃんと日本語で書いてあるのに、日本語じゃないみたいだったからだ。

だから私は、長い間、この本を手にとらなかつた。いや手にとろうとしても最後まで読みとおすことができないのであつた。

中学三年の英語の授業中、先生がこういわれた。

「英国の『不思議の国のアリス』はね、英語だと言葉が韻をふんだり、同じ発音でも意味が全然ちがってくるんだ。アリスは原文で読まなきゃ理解できないよ。」

その話を聞いて、帰り道に本屋によつた。原文は、どこを探してもなかつた。しかし、『鏡の国のアリス』というアリス物語の続編をみつけた。この本をさっそく買って帰つたが、話がチエスを使っているせいかな、私にはとうてい分からなかつた。

でも『不思議の国』よりも『鏡の国』のさし絵を気に入ってしまった。アリスは、気味悪いけど、他のキャラクターたちはふきだしてしまひそうになるくらいおかしかつた。

その中でもハンプティ・ダンプティは、印象が強かつた。私は、ハンプティ・ダンプティをルイス・キャロルが作りだしたと信じきつていた。私は、ハンプティはね、マザー・グースっていう童謡集か

らきてるのよ、と指摘されるまでそう思い続けてきた。

友達がマザー・グースを紹介してくれてからマザー・グースに興味を持ち、本を読みあさった。その中でもアガサ・クリスティの「そして誰もいなくなった」のような型の童謡殺人がお気に入りだった。そこでアリス物語の中のマザー・グースをみていこうと思いついた。

第一章 マザー・グースと「アリス物語」のナンセンス性

私は、ナンセンスという言葉が好きだ。「どうして好きなの？」と聞かれたらこう答えるだろう。「ナンセンスって言葉は現実的価値とか法則からのがれる鑑だから」と。

筆者にはどうもナンセンスという言葉を好んだ人がいるように思われる。それは、いわゆる『不思議の国のアリス』と『鏡の国のアリス』(Through the Looking Glass and what Alice Found There, 1872)を書いたルイス・キャロルである。

作者ルイス・キャロル (Lewis Carroll 1832-98) はオックスフォードのクライスト・チャーチ・カレッジ (Christ Church College at Oxford University) で数学教師をしていた彼は、学寮長リデルズ氏 (Dean Liddells) の次女で仲良しのアリス・リデルズ (Alice Liddells) にせがまれ『不思議の国のアリスの冒険』(Alice's Adventures in Wonderland, 1865) を生みだすきっかけとなった最初の物語である「Alice's Adventures Underground」を書いた。

アリス物語(いわゆる『不思議の国のアリス』と『鏡の国のアリス』を総称する言葉)は、やや難しい構造をしているが、子供にも大人にも親しまれるように西洋人、特に英国人の魂の故郷ともいえ

るマザー・グース (Mother Goose) を下敷きとしてルイス・キャロルは、この話を展開させていったのである。

マザー・グースは、英米の伝承童謡 (Nursery Rhymes) の全般を指している。不思議で面白く、不気味で楽しいナンセンスの世界のはずだが、私が最初に出会った童謡詩は大いに残酷さを感じた。そのグロテスクな英語の童謡詩を一つ紹介しておこう。

お母さんが僕を殺した

お父さんが僕を食べている

弟たちや妹たちがテーブルの下に坐って

僕の骨を拾っている

—— 渡辺茂・訳

この童謡詩は、悪い子はどうなってしまうかという警告の詩なのか冗談で作ったのか事実であるのかは、不明であるが、ドイツのグリム童謡第二巻四十七番『ねずみの木の話』に同じような詩がでてくる。継母に殺されてしまい、そのうえスープにされて、食べられて、ついに鳥になってしまった少年が歌った歌が次の童謡詩であると言われる。ドイツ語の原詩から訳された訳詩で内容を詳しく知るのに助けとなる。

お母さんがぼくを殺し、

お父さんがぼくを食べた。

妹のマルレーンちゃんが

ぼくの骨をのこらずさがし、

絹の布につつんで、

ねずの木の下のにおいた。

キウイト、キウイト、ぼくはなんて

きれいな鳥だろう。

——高橋健二・訳

このような話は、マザー・グースが源で、そこから由来したものであると考えられる。民話が先かマザー・グースが先か、というくらいに伝承文学の原初的な詩情は、ヨーロッパ人の心にしみついている。マザー・グースはまさにヨーロッパの心の故郷であると言えよう。

その後、鳥になった少年は、継母の事故死で人間として生き返り、父・妹と幸せに暮らすところで結末をむかえるが、このノンセンス (Nonsense) に満ちたこの終幕は、哀れな少年に同情を注いだドイツ人が作り足したものだと思われる。

恐しい、俗に言えば、おどろおどろしいマザー・グースを紹介したわけだが次にアリス物語のナンセンスを追求していこう。

ルイス・キャロルがナンセンスの世界に入ったわけとして、『児童文学の笑い』の中で原 昌氏は「父親が旅先からナンセンスに満ちた手紙を送り幼いルイス・キャロルを楽しませた。その影響とドモリからくる自己封鎖的傾向からの脱出感だった……」と記している。ナンセンスを楽しむことにより本当にルイス・キャロルは逃避の世界に入ったのだろうか？ 筆者は、けっしてそうだとは思わない。

アリス物語で展開されるキャラクターたちのドタバタ劇は、ただの面白おかしいナンセンスだと見たりせず、その中で根づいている現実の世界への諷刺 (Satire) があると思うのである。

前に記した通り、作者ルイス・キャロルの最大の悩みはドモリで

あったことである。どうしても自分の本名 (Charles Lutwidge Dodgson [kʰa:lz lʉtwɪdʒ dɔdʒsɒn]) を「ドードードジソン」と発音してしまうのである。それゆえに『不思議の国のアリスの冒険』(以下「不思議の国」と称する) 第三章「コーカス・レースと長いお話」(A Caucus-Race and a Long Tale) のなかでルイス・キャロル自らの分身ともいうべきドードー鳥 (the Dodo) を登場させ自分を皮肉っている。ドモリが原因で人に後ろ指をさされるのを恐れ、人の中に深く入ることができず、次第に人間嫌いになっていった。癖というものは、直そうと思ってもたやすく直るものではない。けれどグリーン (L. Green) の伝記『ルイス・キャロル』(Lewis Carroll) によると少女と少女の間は、ドモリではなかったらしい。少女がキャロルのドモリを止めるといふ葉なら、少年も……、と思うのだが、キャロルは少年が大嫌いであったようである。

そうと思われる理由として『不思議の国』第六章「豚と胡椒」(Pig and Pepper) に次のような一節がでてくる。

「ねえ、おまえ、豚におなりだったら」とアリスは真剣に言いました。「もうお相手にはなりませんよ。用心おしよ」かわいそうに、赤ん坊はまたもやすすり泣きました(それともぶうぶう言ったのか、どっちともわかりませんでした)。それで二人はしばらく無言のままでした。

アリスがちょうど「さて、この児を家に連れて帰ったら、どうしたらいいのかしら」とひそかに考えていますと、またもブウブウと言うのです。あんまりはげしいので少々おどろいて顔をのぞきこみました。今度こそ、つめほどの疑いもありません。それはまぎれも

公爵夫人がアリスに投げてよこした赤ん坊は、もちろん男の子である。アリスの赤ん坊に対する態度は、そりゃあひどいものである。プタになった哀れな赤ん坊はボンと捨てられる運命をたどる。

旺文社文庫の注釈によると、次のようなことが教示せられる。

イギリスの歴史で、はじめグロスター公爵 (Duke of Gloucester) のち政治諷刺詩で「豚」とやじられたリチャード三世 (Richard III) をさすところである。しかし、筆者はそれだけではないと判断する。推測なのだが、ルイス・キャロルは、一時オックスフォードのクライスト・チャーチで男子の学生に数学を教えていた。残酷な男子学生の目にはドモリのルイス・キャロルことドジソンを風采のあがらない教師としか見えず、馬鹿にしていたのだろう。恨みというものは長年の間その感情をひきずるものであろう。『不思議の国』でドジソンは、大嫌いな男の子を豚にかえてしまったのである。これは、ドジソンのささやかな復讐であったにちがいない。まさにドモリを馬鹿にされたにちがいない。まさにドモリを馬鹿にされたルイス・キャロルの変身であるドーデー鳥がペンを魔法のステッキにかえ、少年を豚に変身させたのであろう。

この一節を原 昌氏は、『児童文学の笑い』の中で次のように論述している。プロットのなものととしては、突拍子もない事件の発生や変身の珍奇さがある。これは、予想と結果との不一致によって生ずる笑いを導く。このようなことはありえない、という大人の常識は、子供の空想の世界では、通用しないのである。子供が作りだしたパラレル・ワールド (Parallel world) はすべてが可能で

あるから、次はこうなるだろうという読者の予想を徹底的に裏切ってしまう。

裏切りが裏切ってくれるのは、めまぐるしいほどボンボン飛んでゆく話の背景だけではない。アリス物語に住む住人たち (アリスを除く) も、裏切りを次々に続けてくれるのである。

例えば、一日中人気違い茶会 (A Mad Tea-Party) をする帽子屋、パンくずのついたバターで時計を直そうとする三月うさぎ、しっぽの先から消えニヤニヤ笑いだけを残すチェンパ・キャット (Cheshire Cat) もめごとはずべて死刑で処理する女王……などアリスを除いてすべてなにかが狂っている。

これは、エスカルピ (R. Escarpit) の言う「心情の狂気」だと原 昌氏はいう。常識の通用しないパラレル・ワールドに整理と秩序をあたえられたのは、アリス物語の挿絵画家 ジョン・テニエル (Sir John Tenniel (1820—1914)) の力を借りるところの読者の想像力による心の分析手法によるものである。この物語がわけの分からない馬鹿騒ぎに終わらなかつたのは、ルイス・キャロルの数学的論理に背負うところが大きい、と言わねばならない。

アリス物語を支えている登場人物即ちキャラクターたちは、すべて伝説、マザー・グース、諺、料理などから由来しているわけだ。

全体を通してみると、キャロルの二つのアリス物語の中には、食物や食べることに関連した話が頻繁にでてくる。アリスがうさぎの穴に落ちてゆく最中に、握りしめているオレンジ・マーマレードの瓶をはじめ、「お飲みなさい」スूप、それから気違い帽子屋のお茶会、公爵夫人の家の料理人が作る「こしょうを入れすぎたスूप」、さらに昔はんもの海ガメだったカメモドキそれからまたハ

ートの女王のジャムタルトなどだ。とくに、この中でナンセンスなのは、気違い帽子屋のティーパーティーとハートの女王のジャムタルトであろう。しかしなんとと言っても、気違い帽子屋のティーパーティーは、アリス物語最大のナンセンスだ。

アリスは、チェンシャ・キャットの教えてくれた三月ウサギの家へ行くと、そこでは三月ウサギ (March hare) 気違い帽子屋 (Mad Hatter) nemuri nezumi (ヤマネのこと 'the Dormouse) の三人は、ティーパーティーのまっ最中だった。なぜ彼らが狂っているのか？ それには、それぞれ理由がある。

ルイス・キャロルの熱心な研究者ロイ・ガードナー氏の注釈によると、まず三月ウサギは、三月の発情期に狂ったようになるオスのウサギからくる。十九世紀後半に mad as a March hare 三月ウサギのように狂った、といういいまわしがあつたそうである。

次に帽子屋は、これも当時、mad as a hatter 帽子屋のように狂った、という慣用句があつた。当時このような狂った帽子屋はけっこういたらしい。マーチン・ガードナー (Martin Gardner, Editor of the Annotated Alice, 1960) によると、帽子の素材となるフェルト布の製造過程に水銀中毒にかかりやすく、それで幻覚に襲われるなどの異常を起こしていたらしい。

アリスは、次々と三月ウサギにへ理屈やなんくせをつけられ、自らも気が狂ったようになってしまった。これは、アリス物語を読んでいる読者たちの心をも麻痺させてしまう。

これは、ルイス・キャロルの計略なのだ。アリス物語は、緻密な計算の上に成り立っている。彼は、いつもメモを持ち歩き、思いついたナンセンスをすぐ書きとめたと言う。

結論として意図的に考えられることは、現実世界の女性と見えようアリスがもっているまともな考えを裏切ることにより、読者の注目を集めるのが作者の手法である。特にそれは狂ったキャラクターの考え方の違いが、彼等の会話の中でぶつかり合うことでナンセンスの世界がかもし出され、そこに生れる世界は、ますますナンセンスになってゆくわけである。

この他にルイス・キャロルは、英語だけにしかできない「造語」「掛け言葉」「語呂合わせ」といった言葉遊びを使つて大人になつても読みかえせる作品に仕上げたのである。

二つのアリス物語は、英語だけが持つ言葉遊びのナンセンス、マザー・グース、物語のうへのナンセンスの三本柱によつて成り立っているといえる。

第二章 マザー・グースの住人

ナンセンスを愛するイギリス人の国民性はたくさんさんのナンセンス・ソングを生みだしてきた。そして歴史的事実を比喻で表現した曲もある。この章ではかくれた比喻を持つ三つの詩を見て行きたい。

(一) ハンプティ・ダンプティ

ルイス・キャロルの『鏡の国』で主人公アリスが会うハンプティ・ダンプティ (Humpty Dumpty) は偏屈でつむじ曲がり、高いへいに坐っている卵型の小男で第六章に登場する。アリスの次に世界中の画家たちに最も多く描かれたのは、まぎれもなくこのハンプティ・ダンプティだった。なぜ頑固で皮肉屋の彼はこうも愛されたのだろうか？ここに第六章の一部を引用してみよう。

卵はしだいに大きくなり、だんだんと人間に似てきただけでした。二、三メートル手前まで来ますと、それが目も鼻も口も持っていることがわかりました。近づいてみますと、はつきりハンプティ・ダンプティだとわかりました。——多田幸蔵・訳 旺文社文庫

このハンプティが文献に初めてあらわれたのは、一八〇三年の『マザー・グースのメロディ』のバッセル版本の追加書き込みからだ。と平野敬一氏はその著『マザー・グースの唄—イギリスの伝承童謡—』に書かれている。

もともと「ハンプティってなあに？」というなぞであつたらしいが、ルイスキャロルが彼を物語の世界に引っぱり込んだおかげで卵型の小男という奇妙なイメージが出来あがつてしまった。しかしハンプティ・ダンプティが投げかけている卵のなぞなぞの歴史は古く、分布は広くヨーロッパ全土にわたっている。

ヨーロッパの伝承童謡もっている共通的精神のつながりは、非常に強い。これは、ABCを覚える前からマザー・グースを耳にし、ロザさんでいるせいだからだろう。

マザー・グースの心は、すべてヨーロッパ人全体の心でもある。その証拠にハンプティ・ダンプティは各国で名前を変えて存在しているのである。デンマークではリレ・トリン (Lille Trille)、『ドイツではヒュンペルケン・ビュンペルケン (Hümpelken-pümpel-ken)』というそうである。呼び名は違ふけれどコロコロと転がるような調子は、似ている。

『鏡の国』のハンプティ・ダンプティは、気の毒なことに塀の上から落ち、粉々に割れてしまう。そしてまたここにハンプティ・ダ

ンプティと同じ末路をたどる男がいる。フィネガンズ氏である。このフィネガンズ氏は、ジェイムズ・ジョイス (James Joyce) が書いた大作『フィネガンズ・ウェイク』(一九三九)の主人公である。平野敬一氏は『マザー・グースの詩』の中でこのフィネガンズ氏について次のように述べている。

「酒に酔つぱらつて梯子から落ちて死に、通夜(ウェイク)の対象となるフィネガンズ氏はハンプティ・ダンプティの化身にはかならない。」

フィネガンズ氏の姿はすぐ想像がつく。彼は、きつと野暮でずんぐりむっくりの人だろう。ジョイスはマザー・グースを非常に愛好していた。彼の小説が当時内容も形式も、これまでにない型破りの小説として大反響を呼んだのも登場人物の意志の中にいつも形を変えてマザー・グースを応用していったものによるところが大きい。

ジョイスは『フィネガンズ・ウェイク』を書き始めた頃、眼病になつてしまった。目が見えなくなりつつある彼は、難解なフィネガンズ・ウェイクを書き続け未完成のうちに死んでいった。

私には、フィネガンズ氏は、ただのハンプティの化身だとは思えない。壊れ去つたフィネガンズ氏はジョイス自身、昔夢みた歌手への夢の命を得た姿だと見えてくるのである。

(⇒) トウィードルダムとトウィードルディー

似たもの同士の小男「トウィードルダムとトウィードルディー」は太った双子の兄弟だ。アリスは森から出る道を聞こうとこの二人に会話がなかなか教えてもらえない。そうこうしているうちにトウィードルダムとトウィードルディーは買ったばかりのがらがらをめぐって決闘すると言いだして、戦いの身じたくを始める。ここまで

がダムとディー登場シーンであるがやはりこの二人もマザー・グースの住人である。

Tweedledum and Tweedledee
Agreed to have a battle,
For Tweedledum said Tweedledee
Had spoiled his nice new rattle.
Just then flew by a monstrous crow,
As big as a monstrous
which frightened both the heroes so,
They quite forget their quarrel.

トウィードルダムとトウィードルディー
決闘しようと言った。

トウィードルダムの言い分は
買ったばかりのガラガラを

トウィードルディーがこわしちゃった。
ちょうど飛んできたのは、ばけものカラス

タールのたるも顔負けの大きさ
ふたりの勇士もびっくりぎょうてん
けんかなんかすっかり忘れちゃった。

——渡辺 茂・訳

ダムとディーの詩のもとになったのは、十八世紀の前半におこった音楽闘争だ。この闘争の立て役者たちは、ドイツ系英国人の作曲家ヘンデルとイタリアの作曲家ボノンチーニである。

スタンレー・サディー著『ヘンデル』によると一七三〇年、王立

アカデミーは、この二人の作曲家によるオペラを上演した。しかし不幸にして党派争いが起こってしまった。ある人々はヘンデルの価値を高く評価し、ボノンチーニは聞くに耐えないとし、一方ではボノンチーニを賞賛し、ヘンデルを非難した。小さな争いは次第に大きくなってゆき、この二人の作曲家を支持するそれぞれのグループは政治的党派まで結び付く。国王はヘンデル党であり、それを取り巻く党派もそうであった。マールバラ公爵を含む反対派はボノンチーニを支持した。

今、昔を振り返って見ると、ヘンデルは「音楽の母」といわれバツハと並ぶ後期バロック最大の巨匠の作曲家だが、ボノンチーニは歴史に名をとどめていない。

けれどもボノンチーニは、人々の耳に親しまれ美しい旋律を生み出す才能があったのであろう。ボノンチーニの音楽は、大衆に愛され、ヘンデルは王室の人々に愛されたのだ。対立するほどの二人の音楽は、当時の人々にとって価値もあり共感と呼んだにちがいない。その論争について、英国の讚美歌作者であり速記教師でもあるジョン・バイアラムが次のようにからかっている。

ある人はボノンチーニと比べれば
ヘンデル氏は馬鹿者以外の何者でもない。
またある人は、
ボノンチーニなどヘンデルとは

比べものにならないと断言する。

この両者の言い分は相違はなんとも奇妙。
そんなに違うとはまか不思議。

スタンレー・サディー著『ヘンデル』より

しかし、この詩の作者は、『ガリバー旅行記』を書いたスウィフトかホープだという人もいる。この詩はトウィードル兄弟の唄と関係があったのか、それとももともと古い歌をもとにしてざれ歌を作ったのかよく分からない。

英語辞書を引いてみると「意見や風采など瓜二つうたふたの2人」「似たりよったり」とあるからトウィードル兄弟の唄は完全にイギリス国土に定着した詩うたといえる。

(三) ライオンと一角獣

『ライオンと一角獣』ほど歴史的背景や大衆の気持ちを感じさせてくれる詩は珍しい。この詩はイギリス最大のナンセンス・ソングだろう。

アリスは、白の王さまから、王の王冠をめぐってライオンと一角獣が戦っているのを聞いた。彼らのけんかを白の王様と共に見にいったアリスは、いきなりライオンと一角獣に「おまえは動物か、植物か、鉱物か」と聞かれ驚いてしまう。こんな失礼なことをいきなり口にしてしまう彼らは王族と同じくおごり高ぶっている。

彼らの戦いは真に無意味なもので、ライオンと一角獣、いずれが勝っても王冠はもらえない。

それなのになぜ彼らは意味のない戦いを毎日続けるのか？戦いをやめるのは、食事をする時のみ。この戦いは『不思議の国』第七章気違い茶会に通じる。どちらもエンドレスに続くからである。ナンセンスとは疲れるものだ。

The lion and the unicorn

Were fighting for the crown;

The lion beat the unicorn

All around the town.

Some gave them white bread,

..... (英文略)

And drummed them out of town.

ライオンとユニコーンが

王位のために戦った

ライオンが町じゅうで

ユニコーンをやっつけた。

ある者は白パンをやり

ある者は黒パンをやり

ある者はプラムケーキをやり

太鼓をたたいてどちらも町から追い出した。

——鈴木一博・訳

この詩ができた背景は、イングランドとスコットランドの紛争によるものだ。事の起りは模範議會で有名なエドワード一世が二九六年にスコットランドへせめ込んだことから始まっていく。戦いは、三百年と気の遠くなるくらいに長きに渡った。この終結は生涯独身であったエリザベス一世の死によりチューダー朝の血が絶えてしまい遠い遠慮であるスコットランドの王ジェームズ六世がエリザベス一世の後に入って英国王ジェームズ一世となり、王の下に「The United Kingdom (連合王国)」となり、大ブリテン帝国の王位にくくことで一件落着する。

王位継承の影にはジェームズ一世の母メアリ・スチュアートがいる。「血のメアリ」といわれるくらい新教徒の血を流させた女王だ。ついに新教への迫害を理由にスコットランドを追われる日がきた。

彼女は王位をジェームズにゆずりイングランド女王エリザベス一世に保護を求めたが、旧教徒の反エリザベスのバビントン陰謀が起こり、メアリを殺せという世論が硬化し、メアリはエリザベスの命により絞首刑に処された。『ライオンと一角獣』を作った背景は、バビントン陰謀事件などの混乱によって大衆がうけた大迷惑をされ歌にして歌ったものだと思う。現在のイギリスの王章の中央の王冠をかぶった楯の中では左上にイングランドを表わす三匹の金ライオンがいる。右上はスコットランドを表わす金の立ちライオンが、右下はウェイルズを表わす翼のある赤ライオンが、左下はアイルランドの国章であった白地に金のハーブがある。これは王家の領土を表わしている。そしてこの紋章を支えるものとしては、ご存じの通り右にはイングランドのライオン、左側には、スコットランドのユニコーンが位置する。この二匹の動物の併用は両国の統一を表わしているわけである。

第三章 イギリス遊戯歌『桑の木まわって』

近年、日本のわらべうたは滅びつつあるようだ。なぜ廃れていつているのかを考えると、まず日本の童謡は、マザー・グースのように、一冊の文献になっていないことが国民にあまり口ずさまれていない理由として挙げられる。そして次に日本のわらべうたはどのような情感的で、その歌の背景はともドドロロした濁流が流れているせいか、暗いイメージがつきまよってしまふ。

暗いイメージの一例として子守歌をあげよう。子守りをするのはいたい幼い子守り娘であった。幼い子供のことだからうるさい赤ん坊をほったらかして他の子供たちと遊びまわりたいと思うだろう。だから知らず知らずのうちに子守り娘たちは、子守歌の中で、泣く子を脅したり、その子の母親を皮肉ったり、そして一番の本音である、遊びたい気持ちを歌ったのだろう。

マザー・グースではナンセンスと笑いとばしてしまふ出来事であっても日本人は真剣になって悩んだのであろう。国民的性格を一言でいうと、イギリス人は楽天主であり、日本人は神経質な国民ということになるだろうか。その証拠に日本は、ぼやき歌が多く、イギリス民謡には、それが少ない。マザー・グースは、なんといつても子供の歌だから子どもが遊戯する時や人を選ぶときに使う。

日本でも有名なマザー・グースの遊戯歌としては、もちろん『ロンドン橋おちた』だろう。遊び方は二人でアーチを作り、歌に合わせて他の子らがアーチをくぐりぬけ回り続ける。最後のフレーズでアーチを下におろしそれにひっかかってしまった子が鬼である。これは、極めて日本民謡『通りゃんせ』に似ている。遊びの仕方は万国共通らしい。

『鏡の国』第四章に一つ遊戯歌がでてくる。これはアリスがトウイードルダムとトウイードルディー兄弟といっしょに輪を作ってぐるぐる歩いているシーンであるが、それは『桑の木まわって』の背景にある。輪を作ってぐるぐるまわるのは、決して踊っているのではない。アリス物語にはリズムミカルな音楽は似合わない。そのおかしな状態(夢)から覚めたアリスは、お姉さんに話している。

「でも確におかしかったわ：わたし気がつくといつたのまにか『桑

の木まわってそらぐるり』をうたっているのよ。いつうたいたしたのかわからないけれど、ずっとずっと前からうたった気がするのよ。」
アリスが、無意識のうちにくぐるると手をつないで踊っていたこのおかしい現象はナンセンスと言えばナンセンスだ。しかしマザー・グースは物心つく前から子供に親しまれ、生活の一部となっている。前記のアリスが姉に話す英語は次の原文にもついている。

Alice said afterwards, when she was telling her sister the history of all this, "to find myself singing 'Here we go round the mulberry bush.' I don't know when I began it, but somehow I felt as if I'd been singing it a long long time!"

これらの引用でわかるように、マザー・グースは英国民には一人の体にしみ込み、知らず知らずのうちに体の一部となっていくわけである。

ここで『桑の木まわって』をみておこう。

- (1) Here we go round the mulberry bush,
The mulberry bush, the mulberry bush,
Here we go round the mulberry bush,
On a cold and frosty morning.
- (2) This is the way we wash our clothes,
Wash our clothes, wash our clothes,
This is the way we wash our clothes,
On a cold and frosty morning.

(一) 桑の木のまわりを回ろうよ

桑の木 桑の木

桑の木のまわりを回ろうよ

霜の降りた寒い朝に。

(二) 衣服はこういうふうに洗うんだ

衣服を洗う 衣服を洗う

衣服はこんなふうに洗うんだ

霜の降りた寒い朝に。

藤野紀男著『マザー・グース案内』と渡辺茂著『マザー・グース事典』を合わせて比較してみると『桑の木まわって』の遊戯の仕方はどうやら二種あるらしい。

渡辺茂氏の『マザー・グース事典』によると、一種の子取り遊びをしながら手をつないでぐるぐるまわり続ける。この遊びは『花いちもんめ』に似ている。アリスにでてきた第四章のシーンは、この永遠に続きそうな子取り遊びをあらわしナンセンス化されていた。

かわって、藤野紀男氏の『マザー・グース案内』によると(1)のスタンザ(stanza)の終わりまで手をつないで歌に合わせてぐるぐるまわり、(2)に入ったら全員止まって服を洗うまねをする。

これは、ジェスチャーを伴った輪踊りの一つ。これをジェスチャーのスタンザの間に繰り返して遊ぶこともできる。例えば(in on our clothes)しわをのばそうならアイロンをかけるまねをしたらいい。

『クマのプーさん』を書いたA・A・ミルンは、マザー・グースに

よく似た童謡を作り始めた。両方の詩は子供に歌ってあげるために作られた。A・A・ミルンとマザー・グースの心は一つだけである。それを繰り返すうちに歌が集まって、A・A・ミルンは、“When We Are Six (1927)”と“When We Were Very Young” (1924)の二冊の童謡集を書いた。

そういう理由からかA・A・ミルンは『クマのプーさん』を余計子供に親しみやすいものにするため『桑の木まわって』のジェスチャー遊びを使ったのであろう。マザー・グースなどの童謡をふんだんに織り込んでいるのが、A・A・ミルンとルイス・キャロルの最大の特徴である。

イギリス民謡の遊戯の中で圧倒的に輪になって踊るものが多い。輪になって軽く楽しく跳ねて回る遊び。足だけの動きですむから小さな子も一緒になって遊べる。これは、日本民謡『かじめかじめ』と『ひらいた』に通じる。遊び方は少し違うのだが、ここに『ひらいた』を紹介しておこう。

ひーらいた ひーらいた
何の花が ひーらいた
蓮華の花が ひーらいた
ひーらいたと思つたら
いつのまにか つーぼんだ

つーぼんだ つーぼんだ
何の花が つーぼんだ
蓮華の花が つーぼんだ

つーぼんだと思つたら
いつのまにか ひーらいた

ただ花が開いたり、しぼんだりする何の意味もないつまらない歌なのだが、子供の中では、人気の高い歌である。遊び方としては、まず手をつないで小さくかたまり開いていたり、開いているのを次第に小さくなっていくのである。

『桑の木まわって』の他にポピュラーな輪遊びは『ばらの花輪をつくろうよ』だろう。

Ring-a-ring o'roses,
A pocket full of posies,
A-tishoo! A-tishoo!
we all fall down.

ばらのはなわを つくろうよ
ポケットには はなびらいっぱい
はくしょん、はくしょん、
みんないっしょに しやがもうよ。

— 渡辺 茂・訳

『鏡の国』のアリス物語第四章でトウィードル兄弟とダンスを踊った曲『桑の木まわって』とこの『ばらの花輪をつくろうよ』とのさしかえは可能だろうか。やはりルイス・キャロルのナンセンス的発想からして不可能だ。その理由は、『桑の木まわって』は、手をつないでぐるぐると回るだけなのに比べて、『ばらの花輪をつくろ

うよ』は、A-tishoo! (はっくしょん) の時、しゃがむというアクションがある。

ルイス・キャロルは、くるくるまわるだけの堂々めぐりを表したものにハックションという動作が邪魔したのでは、ナンセンスは生まれてこなかったろう。『ばらの花輪をつくらうよ』のハックションでしゃがむ動作は幾分『かごめ、かごめ』に通じるところがある。このことから一つはっきりしたことがある。風土、習慣、メロディは違うけれども遊びの心は一つだということである。民謡の言葉にあらわれた心の中に遊びでみつけた心があらわれてくるのだ。

第四章 アリス物語に出てくる唄のパロディー化

替え歌即ちパロディー (Parody) は、有名な詩文をまねして、こっけいな味を出した作品をいう。筆者は、ルイス・キャロルという作家は実にパロディーがうまい、と思う。『マザー・グースの唄—イギリス伝承童謡—』の中で、著者平野敬一氏は次のように書いている。

自分の作品の永生を願うパロディストは、短命なかげろうのような作品をパロディーのよりどころにしなくてはならない。

ルイス・キャロルは、アリス物語に永久の命を与えようとして多くのパロディーを生み出したのか。いやそうではない。ルイス・キャロルは自分自身を楽しませるために、それらの替え歌は本当に偶然にできたのだ。自分の殻に閉じこもるためだけでなく、アリス・リデルを楽しませるだけであると言えよう。他の子供たちのために

はなく、アリス・リデルの心の中で、アリス物語の永遠の命を求めたのではなからうか。アリス物語の中で重要なキーポイントは、やはりマザー・グースだろう。実に、マザー・グースは作品の中で生き生きと活躍している。例えば、第二章で紹介したハンプティ・ダンプティ、双子のトウィードル兄弟、ライオンと一角獣などは、マザー・グースののろいで惨々なめに会わされた。ハンプティ・ダンプティは、塀から落ち砕け散り死んでしまった。その後、王様の馬や家来が集まってきても彼は生き返らなかつた。それとトウィードル兄弟は、がらがらをめぐって大げんかを始め、その上、巨大カラスにおそわれ逃げだし、ライオンと一角獣は太鼓を叩かれ町から追いだされた。この場合マザー・グースは、アガサ・クリステリーの最大の傑作『そして誰もいなくなった』に使われた「十人のインディアンの子(ニグロの子)」のような役割を果たしている。ハンプティ、トウィードル兄弟、ライオンと一角獣、彼らにとってマザー・グースは予言詩であつた。

この他に、マザー・グースは、各箇所でも効果的に使われている。例えば『不思議の国』第七章気違い帽子屋のお茶会で、帽子屋はアリスにこの歌を知ってるかい、と歌ってきかず歌が『きらきら星』のパロディーである。

Up above the world you fly,

Like a tea-tray in the sky.

'Tinkle, tinkle,'

'Tinkle, twinkle little bat!

How I wonder what you're at!
Up above the world you fly,
Like a tea-tray in the sky.'

ちのきら光れ 小さなこもりさん
いったい お前は 何してゐる?
この世をはるかに 下に見て

お空を飛んでくお盆のように。

—高橋康也・訳

ルイス・キャロルのおどけたパロディは、プロ的で刺激的な「インサイド・ジョーク」と呼ばれている。インサイド←内的なジョークとは、身内でうけるジョークをいっている。このなれ歌のよとは、もぢぢン・ジェイン・テイラーの『星』(Star)である。

Twinkle, twinkle, little starである。

Twinkle, twinkle, little star,
How I wonder what you are!
Up above the world so high,
Like a diamond in the sky.

キラキラ輝く 小さな星よ
あなたはいったい なんだらう
世界の上を はるかに高く
空に浮かんだ ダイヤモンドみたい。

—高橋康也・訳

この歌は、子供たちがいつも不思議に思い、願いをかけ、憧れる星を歌ったもの。親しみやすいメロディで子供の心から決して消えることはない。

この歌は、マザー・グースの中でも最もよく知られた歌だろう。他のマザー・グースは、作者不明という歌が多いが、この歌の場合、出どころがはっきりしている。

この歌は、オービー夫妻の研究書 (Iona & Peter Opie *The Oxford Dictionary of Nursery Rhymes*, 1951) によれば、イギリスのジェイン・テイラー夫人 (Jane Taylor 1782—1866) で、姉のアン (Ann Taylor 1782—1866) との合作詩集 *Rhymes for the Nursery* (1806年) の中で初めて発表されたといっている。

一八二二年に出版された *Nursery Rhymes, Tales and Jingles* というマザー・グース集にすでに収められているところからわかる通り、発表されて間もなく広まった。

ルイス・キャロルは Twinkle, twinkle, little star のポエリー性をわらってパロディ化を試みたのであろう。

日本人が星を愛するように、西洋人も、星に願いをかける。「リス物語」の歌にも星に関する歌がある。

原歌 Beautiful star, in heaven so bright,

Softly falls thy silvery light

As thou movest from earth afar,

Star of the evening beautiful star!

Star of the evening beautiful star!

ちのきら星お空に明るく

地上はるかに動くとき

やさしく 銀の光を落とす

宵の明星 きらきら星よ

宵の明星 きらきら星よ

この歌をまたもやルイス・キャロルは、パロディー化してしまつた。『不思議の国』第十章海老のカドリールの中で「再び普通に起る日がくるかしら」と深刻な不安を抱えているプリスをなぐさめるためウミガメモドキたちが歌う歌がこれである。次にこの原詩と訳詩を掲げる。

Beautiful soup, so rich and green,

Waiting in a hot tureen!

Who for such dainties would not stoop?

Soup of the evening, beautiful soup!

Soup of the evening, beautiful soup!

とろりときれいな緑色、みごとなスープが待っている

湯気の立てるなべのなか、

こんなおいしいご馳走に

とびつかないでいられよか?

晩のスープよ、みごとなスープ!

晩のスープよ、みごとなスープ!

原 昌著『児童文学の笑い』の中でこのパロディー詩のことが述べられてゐる。原歌は、伝承童謡『宵の明星』(Star of the Evening)である。対比してみると、童謡の形式は、ほとんど同じ

である。しかし、その内容において原歌の壮麗な美しさは消えて、『きらきら星』は(おいしいスープ)に化ける。この形式と内容の不一致がおかしさを生むのである。

私は、この詩を残酷だと思つた。しかもスープの素となるウミガメモドキが涙をうかべながら歌うのである。いくら悲しんでいる者がいても自らを笑いの種としてまでなぐさめることができるのか。私には、それはどうしてできそうにない。

子供にこの歌を聞かせたらウミガメモドキの運命を笑うだろう。いくら子供が無邪気であらうと心の底にはチラリと残酷さをのぞかせている。ここで教訓歌を一つ挙げてみよう。これもパロディーである。

How doth the little crocodile

Improve his shining tail,

And pour the waters of the Nile

On every golden scale!

How cheerfully he seems to grin,

How neatly spreads his claws,

And welcomes little fishes in,

with gently smiling jaws!

なんとかわいいワニくん

きんきら尻尾をみがいっている

ナイルの水をぎゅぎゅと

黄の鱗に浴びさせる。

にたりとなてもうれしそ

じょうずに爪をひろげては
にやりとやさしく口を開いて
おめこい、おめこい小魚さん。

この詩は、ワッツ (Issac Watts 1674—1748) という牧師さんが作った『なまけといたずらのいましめ』という教訓詩をもじったパロディで、原文は次のような英語の童謡詩である。併せて訳詩も試みておく。

How skillfully she builds her cell!
How neat she spreads the wax!
And labors hard to shore it well
With the sweet food she makes.

なんと おつとめ蜜蜂さん
日の照る時間をむだにせず
開いた花をのこりなく
ひねもす蜜汁集めてる。

本歌は、とても働きものの蜜蜂くんの話なのだが、パロディー化された詩のワニくんはなまけものである。大きく口を開け魚が来るまで待っているワニくんは、まるで北原白秋作詩『待ちぼうけ』にでてくるお百姓さんそのものじゃないかと筆者は思う。どうやら子供は、ふまじめな歌が好きであるようだ。この他にもキャロルは、スージー(R. Sauney)の教訓歌をふざけた歌にしたラングフォード(W. G. Langford)の優雅な子守歌に変えてより子供に親しまれるものを作ったりしている。

第五章 ルイス・キャロルのオリジナル詩

『ジャバウォックの歌』

(紙数のつこうで本文の掲載省略)

おわりに

卒論の下準備をしていく段階で難しいテーマを選んでしまったと後悔した。でもそれとは反対に、私のマザー・グースへの疑問は大きくなるばかりだった。日本民謡とイギリス民謡の共通性、ハンブティの行方などなど。

私の卒論のテーマは「アリス物語」作品にあらわれるマザー・グースという題目であったが、テーマにしっかりと従った論文といえるだろうか。人が読めばエッセイのように思われるかもしれない。しかし、私は一生懸命に卒論を書いたと胸をはっている。二年に入ってから卒論、卒論と毎日がけたたましく動いてきたが、この一年間、じつに充実していた。

第五章は、大変に苦労した。マザー・グースではないのに『ジャバ・ウォッキー』を加える試みは、私にとっては荷が重過ぎたように思う。

然し、いままで興味を持っていたマザー・グースを私なりに研究できた。つたない文章ではあるが論文もどきのものができあがった。

参考文献

渡辺 茂『マザー・グース事典』(北星堂書店)

藤野紀男『マザー・グースの唄が聞こえる』(朝日イブニングニュース社)

ース社)

平野敏一『マザー・グースの唄—イギリス伝承童謡』(中央公論

社)

『マザー・グースの世界』(エレック出版)

鈴木一博『マザー・グースの誕生』(社会思想社)

桑原茂夫『アリスのティーパーティー』(河出文庫)

『マザー・グースとあそぶ本』(ラポ教育センター)

スタンレー・サディー著『ヘンデル』(全音楽出版社)

高橋康也『ノンセンス大全』(晶文社)

藤野紀男『マザー・グース案内』(大修館書店)

原 昌『児童文学の笑い—ナンセンス、ヒューモア、サタイヤ

ー

三沢みずず『童話・二十四の扉—イギリス児童文学への招待—』

なお物語の引用部分は、『不思議の国』『鏡の国』とも多田幸蔵
訳の旺文社文庫によるものである。

〔評〕

読了した。作品を研究の主題と副題にそいよく読み、深く考え、
広く調べ、文学研究の一つとなつてゐることをよろこばしく思う。
日本のわらべうたと比較して考察を加えたことは、此の研究に鑑賞
力の養いを与え、すぐれた「文学実践」の萌芽を生み出している。
外国文学の研究は—翻訳の恩恵にもよるが—自国文学の理解に測り
知れない視野を供してくれることを自覚したと思う。

今後さらにいっそうの読書と研究を積み評論、創作の活動を続け
るよう期待している。

寺田芳徳